

# Stokes phenomena of holonomic systems

北大理・本多 尚文

(Naofumi HONDA)

本稿では、不確定特異点型、極大過剰決定系の、正則マイクロ関数解に関する Stokes 現象について述べようと思う。微分方程式論で知られる Stokes 現象は、形式巾級数解に漸近する角領域上の正則解を、漸近を壊しながら延長する時現れる障害であり、また、異なる角領域上の解を接続する問題と捉えられる。この問題を超局所的に考察する為には、最初に、形式巾級数解に相対する解層が必要である。

この様な解層を構成する為に以下の準備を行う。

## §1. Sheaf $\mathcal{E}^{R,f-0}$

$Y \subset X$  を複素多様体と  $Y$  の部分複素多様体とする。

$T^*X$  の局所座標系  $(z_1, \dots, z_n; \zeta_1, \dots, \zeta_n)$ ,  $p = (0; dz_1)$

ます。  $\mathcal{E}^{R,f}$  の左、右両行 "pull  $\mathbb{R} \cdot (0)$  " を次の様に定義する。

$$S^{(-0)}(\Omega) := \left\{ p(z, \zeta) \in \mathcal{O}(\Omega) ; \exists R > 0, \exists \sigma > 0, \exists C, \text{ st. } |p(x, \zeta)| \leq C e^{-R|\zeta|^\sigma} \right\}$$

$$S_p^{(-0)} := \lim_{\Omega \ni p} S^{(-0)}(\Omega)$$

但し、 $\Omega$  は、 $p$  の  $\mathbb{R}^+$  Conic な近傍を走る  $\mathfrak{a}$  とする。

片岡, 青木両先生の Symbol Calculus に従い,  $I^{(-0)}$  の  $p$ -stark  
 を射  $S_p^{(-0)} \rightarrow \Sigma_p^{\text{Rf}}$  の像  $\text{Im } S_p^{(-0)}$  を定義する.

更に  $\Sigma^{\text{Rf} \circ}$  を

$$\Sigma^{\text{Rf} \circ} := \frac{\Sigma^{\text{Rf}}}{I^{\text{Rf} \circ (-0)}}$$

を定義する.  $\Sigma^{\text{Rf} \circ}$  は  $I^{\text{Rf} \circ (-0)}$  が  $\Sigma^{\text{Rf}}$  の両側 "PID" かつ, 明らかに  
 環であり, 更に, 左右  $\Sigma^{\text{Rf}}$  module である. また,  $\Sigma$  上環である.

$\mathbb{C}^*$  上の  $C_{Y|X}^{\text{Rf}}$  に対応する層,  $C_{Y|X}^{\text{Rf} \circ}$  は,

$$C_{Y|X}^{\text{Rf} \circ} := \Sigma^{\text{Rf} \circ} \otimes_{\Sigma^{\text{Rf}}} C_{Y|X}^{\text{Rf}}$$

を定義する.

$C_{Y|X}^{\text{Rf} \circ}$  を導く理由は,  $C_{Y|X}^{\text{Rf} \circ}$  の解を考へる事は  
 $C_{Y|X}^{\text{Rf}}$  の解を指数減少の解を省略し連続に  $\ll$  事に相当  
 するからである. これは常微分方程式における, 異なる領域上  
 の解を同じ之漸近展開を保ちながら連続する問題と同等  
 と言えらるからである.

実際  $C_{Y|X}^{\text{Rf}}$  解は局所的な Stokes 現象のみ, 複素構造  
 を持つ.  $\mathbb{C}$ -constructible sheaf とは一般には異なるが,

$C_{Y|X}^{\text{Rf} \circ}$  解は, 再び  $\mathbb{C}$ -constructible sheaf となる.

この事は, 以下の章で多少の準備の後を示す.

§2  $C_{T^*X}^{RF}, C_{T^*X}^{RF,0}$  解

$\Delta \subset T^*X$  を  $\mathbb{C}^*$  Conic ラグランジアン 多様体,  $\alpha \geq 1$  を有理数とすると  
 $E \subset \Delta$  を  $\mathbb{C}^*$  Conic 部分多様体とする時,  $E$  fiber に沿った  
 euler vector field より誘導される射

$$\theta_E : T^*E \rightarrow \mathbb{C}$$

が定義される.  $\omega$  は  $E \subset \Delta$  より誘導される射

$$T^*E \xleftarrow{p_E} E \times_{\Delta} T^*\Delta \xrightarrow{\omega} T^*\Delta$$

と合成して,

$$\theta_{p_E} : E \times_{\Delta} T^*\Delta \xrightarrow{p_E} T^*E \xrightarrow{\theta_E} E \times \mathbb{C}$$

を得る.

$p \in E$  の近傍で定義された holonomic  $\mathbb{C}^*$  module  $M$  に対し  
 $\Delta$  に沿った 不確定特異点度  $\alpha$  の filtration  $F_{r,\Delta}^{(\alpha)}(M)$  を  
 与える.  $F_{r,\Delta}^{(\alpha)}(M)$  に対し

$$G_{r,\Delta}^{(\alpha)}(M) = \left( \bigoplus_{\mathbb{R}} F_{r,\Delta}^{(\alpha), \mathbb{R}}(M) / F_{r,0}^{(\alpha), \mathbb{R}}(M) \right) \otimes_{\pi^{-1}\theta_{\Delta}} \theta_{T^*\Delta}$$

$$\Sigma_{\Delta}^{(\alpha)}(M) = \text{Supp}(G_{r,\Delta}^{(\alpha)}(M))$$

と定義する. 一般に  $\Sigma_{\Delta}^{(\alpha)}(M) \subset T^*\Delta$  となる様な  $\alpha$   
 は, 有限個の点しかない. その様な点の組全体

$$(\sigma_1, \sigma_2, \dots, \sigma_e) \quad (\sigma_1 > \sigma_2 > \dots > \sigma_e > 1)$$

を  $M$  の (対心2の) 不確定特異点度と呼ぶ.

最後に  $\tilde{\Sigma}_{\Delta}^{(\alpha)}(M)$  を  $\Sigma_{\Delta}^{(\alpha)}(M)$  の射  $\theta_{p_E}$  による像とする.

②  $A, \Lambda_0 \subset \mathbb{C}T^*X$  を点  $p$  で clean intersect する 2 つの Lagrangian 部分多様体とし、 $E = A \cap \Lambda_0$  とおく。

$M$  を holonomic system とし、 $\text{supp}(M) \subset A$  を満たすものと  
 $N$  を  $\Lambda_0$  に沿った simple holonomic system とする。

定理:

次の 2 つの条件 (C.1.σ), (C.2.σ)

(C.1.σ)  $\widetilde{\Sigma}_A^{(0)}(M) \setminus \{E \times \{0\}\} \cap \{E \times \{0\}\} = \emptyset$

(C.2.σ)  $G_A^{(0)}(M)$  は free  $\mathcal{O}_A$  module となる種々の  $M$  の filtration  $F_A^{(0)}(M)$  が存在する。

が  $M$  の不確定特異点座標の組  $(\sigma_2, \sigma_1, \dots, \sigma_1)$  の中 2 つの  $\sigma_i$  についてが成り立つものとす。

①  $\text{RHom}_{\Sigma_x^{\text{Rf}}} (M^{\text{Rf}}, N^{\text{Rf}}[-0])$  は、 $\text{Codim}_{\Lambda_0}(E)$  以上の次元の sheaf であり、これは、一般に constructible sheaf となる。

②  $\text{RHom}_{\Sigma_x^{\text{Rf}}} (M^{\text{Rf}}, N^{\text{Rf}})$  は、同様に  $\text{Codim}_{\Lambda_0}(E)$  のみに次元が残り、これは、一般に constructible sheaf となる。その micro support は、

$\bigcup_{\sigma_i} \widetilde{\Sigma}_A^{(0)}(M)$  と実超平面との交わりを形成される (この部分の sheaf 構造)

$\text{RHom}_{\Sigma_x^{\text{Rf}}} (M^{\text{Rf}}, N^{\text{Rf}})$  が sheaf 構造を持たない点から

また Stokes 現象をもち、古典的接続による sheaf が

$\text{RHom}_{\Sigma_x^{\text{Rf}}} (M^{\text{Rf}}, N^{\text{Rf}}[-0])$  と解釈出来る。

この2つの解層には標準射

$$R\mathrm{Hom}_{\Sigma_X^{\mathrm{Rf}}}(\mathcal{M}^{\mathrm{Rf}}, \mathcal{N}^{\mathrm{Rf}}) \rightarrow R\mathrm{Hom}_{\Sigma_X^{\mathrm{Rf}}}(\mathcal{M}^{\mathrm{Rf}}, \mathcal{N}^{\mathrm{Rf}} \circ)$$

が存在する。よって、この2つの解層及び射が超局所解析における Stokes 現象の舞台になる。上の射はコホモロジー間の全射となることに注意する。

### §3. 例

§2 を踏まえて、次の定義を導入する。まず、

$$X = \mathbb{C}, \quad Y = \{0\}, \quad \Lambda = \Gamma_Y^* X \simeq \mathbb{C}_Y^*$$

$\{\Lambda_\alpha\}$  を  $\Lambda$  の  $\mathbb{R}^+$  Conic 射 Stratification とし、

$$U(\Lambda_\alpha) = \bigcup_{\Lambda_\alpha \subset \Lambda_\beta} \Lambda_\beta$$

と置く。  $\forall \alpha$  に対して  $U(\Lambda_\alpha)$  は単連結と仮定する。

2つの Categories

$$\mathcal{C}(\{\Lambda_\alpha\}) := \left\{ \begin{array}{l} \{\Lambda_\alpha\} \text{ を Stratification とし } \rightarrow \mathbb{R}\text{-Constructible} \\ \text{sheaf の cat.} \end{array} \right.$$

$$\mathcal{C}^{\mathrm{st}}(\{\Lambda_\alpha\}) := \left\{ \begin{array}{l} \mathrm{ob}(\mathcal{C}^{\mathrm{st}}(\{\Lambda_\alpha\})) = \mathrm{ob}(\mathcal{C}(\{\Lambda_\alpha\})) \\ \mathrm{Hom}_{\mathcal{C}^{\mathrm{st}}(\{\Lambda_\alpha\})}(F, G) = \bigoplus_{\alpha} \mathrm{Hom}_{\mathbb{C}}(F|_{U(\Lambda_\alpha)}, G|_{U(\Lambda_\alpha)}) \end{array} \right.$$

とする。

次に、単純性事実が成立する。



$$\mathcal{P}_{n,\lambda} := r^{-1} r_* (\mathcal{E}_x u) \quad (r: \overset{\circ}{T}_r^* X \rightarrow Y)$$

ある  $\mathcal{E}$  module が定義されるが、これは holonomic  $\mathcal{E}$  module である。実際

$$\mathcal{P}_{n,\lambda} = \frac{\mathcal{E}_x}{\mathcal{E}_x \left( \prod_{k=0}^{n-1} \left( \theta + \frac{n+k}{n} \right) - \left( \frac{\lambda}{n} \right)^n D \right)}$$

( $\theta = \mathbb{Z}D$ )

$\theta = \mathbb{Z}$ . 超局所版  $t$ -equation は

$$\mathcal{M}_n = \frac{\mathcal{E}_x}{\mathcal{E}_x \left( \prod_{k=0}^{n-1} \left( \theta + \frac{n+1+k}{n+1} \right) - \left( \frac{1}{n+1} \right)^n D \right)}$$

と定義される。  $\mathcal{P}_{n,\lambda}$  と  $\mathcal{M}_n$  は形は似ているが Stokes 現象の意味で全く違う。  $\mathcal{P}_{n,\lambda}$  は  $f_{i,\lambda}(D)$  といい、指数部が  $\lambda$  から構成される解を持つ。基底的な system である。

$\theta = \mathbb{Z}$ .

$$F = \mathrm{RHom}_{\mathcal{E}_x} (\mathcal{M}_n, \mathcal{P}_{n, \frac{n}{n+1}} \mathbb{R}f)$$

$$G = \mathrm{RHom}_{\mathcal{E}_x} (\mathcal{M}_n, \mathcal{P}_{n, \frac{n}{n+1}} \mathbb{R}f - \mathbb{O})$$

とよく、おさげ。  $F$  と  $G$  は degree 0 に集束した sheaf である。

$F$  は  $\mathbb{R}$ -Constructible,  $G$  は  $\mathbb{C}$ -Constructible である。

$$F \rightarrow G \rightarrow 0$$

は全射。

更に.  $\Sigma^\infty$  の解属

$$F^\infty = \text{RHom}_{\Sigma_X}(m_n, \mathcal{O}_{\Sigma_X}^{\otimes n})$$

は.  $\mathbb{C}$ -Constructible である.

$$\begin{array}{ccc} & F^\infty & \\ \uparrow & \nearrow & \\ F & \xrightarrow{\quad} & G \rightarrow 0 \end{array}$$

$F^\infty$  と  $G$  は local system だから. それぞれの特性多項式を計算すると. (結構 2 がたくさん出てくるので. 簡単のみ)

$$F^\infty \text{ は } \mathcal{L}^\infty(\lambda) = \prod_{\substack{p=0 \\ p \neq 1}}^{n-1} (\lambda^n - \omega_{n+1}^p)$$

$$G \text{ は } \mathcal{L}^{f=0}(\lambda) = (\lambda^n + (-1)^n \omega_{n+1})$$

ここで. 組  $F \rightarrow G \rightarrow 0$  が Stokes 現象を持たないとする.

$G$  から  $F^\infty$  への射が存在する事になるが.  $\mathcal{L}^\infty(\lambda)$  と  $\mathcal{L}^{f=0}(\lambda)$

は共通根がないから不可能である. 組  $F \rightarrow G \rightarrow 0$  は必ず

Stokes 現象を持つ. Stokes map は  $C^{st}(\mathbb{A}_{\alpha, \beta})$  のみに

存在する. ちなみに.  $F$  は

$$\pi(SS(F)) = \begin{cases} \mathbb{R}_\Sigma^- & (n=2) \\ \mathbb{R}_\Sigma^- \cup \mathbb{R}_\Sigma^+ & (n \geq 3) \end{cases}$$

$$(\pi: T^* \mathbb{R}_{\text{pos}}^n \rightarrow \mathbb{R}_{\text{pos}}^n)$$

であり. 複素構造を持たない.

## §4 加群自身の Stokes 現象

§2 から  $L^{f=0} := R\mathrm{Hom}_{\Sigma_X}(m, C_{\Gamma|X}^{\mathbb{R}, f=0})$  は  $\mathbb{C}$ -Constructible であるので、確定特異点型の holonomic  $\Sigma_X$  module  $ST(m)$  を

$$R\mathrm{Hom}_{\Sigma_X}(ST(m), C_{\Gamma|X}^{\mathbb{R}, f}) = L^{f=0}$$

を満たすものが  $\Gamma^*X$  の近傍で唯一存在する。

この  $ST(m)$  は、 $K$ - $K$  の結果である

“任意の holonomic module  $m$  に対し、R.S holonomic  $\Sigma_X$  module  $m_{\mathrm{reg}}$  が存在し、 $\Sigma_X^{\mathrm{reg}} \otimes_{\Sigma_X} m = \Sigma_X^{\mathrm{reg}} \otimes_{\Sigma_X} m_{\mathrm{reg}}$  を満たす”

という主張に現れる  $m_{\mathrm{reg}}$  と一般に異なる。

(当然だが、 $m$  自身が R.S なる場合は一致する)

(つまり  $ST(m)$  は  $m_{\mathrm{reg}}$  で失われた情報を含んでいる)

実際 §3 の例で、 $m_{\mathrm{reg}}$  に対応する  $\mathcal{L}^{\infty}(\lambda)$  は  $\mathcal{L}=1$  の情報を使っているが、 $ST(m)$  に対応する  $\mathcal{L}^{f=0}(\lambda)$  はその部分の情報を

まったく捨っている。

またしく捨っている。

またしく捨っている。

この最後の章では、 $ST(m)$  と  $m$  の関係を調べる。これにも

Stokes 現象と同様の事が発生する事を簡単に述べる。

以下、 $L^f := R\mathrm{Hom}_{\Sigma_X}(m, C_{\Gamma|X}^{\mathbb{R}, f})$  とする。

$\mathrm{Hom}_{\mathbb{C}}(L^{f=0}, L^{f=0})$  は恒等射  $\mathrm{id}$  を含むが、この恒等射

は、 $\Gamma^*X$  全体で定義された  $\Sigma^{\mathbb{R}, f=0}$  射  $\phi^{f=0}$

$$\phi^{f=0} : m^{\mathbb{R}, f=0} \rightarrow ST(m)^{\mathbb{R}, f=0} \rightarrow 0 \quad (\text{全射})$$

を誘導する。

非常に粗く言うと、 $\Sigma^{R.f-0}$  を考える限り、ちょうど指数部を合致した漸近展開の部分  $\Sigma(m)$  が  $\mathcal{L}^f$  にいる状態を現している。

そこで  $\Sigma^{R.f-0}$  射  $\phi^{f-0} \in \Sigma^{R.f}$  射の実現する事を考える。

1つの strata  $\Lambda_\alpha$  を取り、 $\Lambda_\alpha$  上の  $\mathcal{L}^f \rightarrow \mathcal{L}^{f-0}$  に対する Stokes map  $\phi_\alpha$  を取る。この  $\phi_\alpha$  は

$$\begin{aligned} \text{Hom}_\alpha(\mathcal{L}^{f-0}, \mathcal{L}^f)|_{\Lambda_\alpha} &\rightarrow \mathcal{L}^f \otimes (\mathcal{L}^{f-0})^*|_{\Lambda_\alpha} \\ &\downarrow \\ \text{Hom}_{\Sigma_x^{R.f}}(\mathcal{M}^{R.f}, C_{\text{rix}}^{R.f}) \otimes \text{Hom}_{\Sigma_x^{R.f}}(C_{\text{rix}}^{R.f}, \Sigma(m)^{R.f})|_{\Lambda_\alpha} \\ &\downarrow \\ \text{Hom}_{\Sigma_x^{R.f}}(\mathcal{M}^{R.f}, \Sigma(m)^{R.f})|_{\Lambda_\alpha} \end{aligned}$$

より、各角領域  $\Lambda_\alpha$  上、

$$\begin{array}{ccccc} \mathcal{M}^{R.f} & \xrightarrow{\phi_\alpha} & \Sigma(m)^{R.f} & \rightarrow & 0 \\ \downarrow & \curvearrowright & \downarrow & & \\ \mathcal{M}^{R.f-0} & \xrightarrow{\phi^{f-0}} & \Sigma(m)^{R.f-0} & \rightarrow & 0 \end{array}$$

を可換とする様な  $\phi_\alpha$  を誘導する。以下の事が、証明出来る。(  $\phi^{f-0}$  自身は  $\mathbb{C}^*$  全体に存在する事に注意 )

定理  $\phi^{f-0}$  は各角領域  $\Lambda_\alpha$  上  $\Sigma^{R.f}$  射  $\phi_\alpha$  の実現出来る。

$\mathbb{C}^*$  上全体で、 $\Sigma_x$  射  $\phi$  で (#) を満たすものが存在する事と、 $\mathcal{L}^f \rightarrow \mathcal{L}^{f-0} \rightarrow 0$  が Stokes 現象を持たない事は同値である。  $\square$

最後に、 $\Sigma(m)$  が代数的に  $m$  から決まる事と良いのであるが、

まだ、十分に示せていないので今回は省略する。